

平成 28 年度事業報告

(自 平成 28 年 2 月 1 日～至 平成 29 年 1 月 31 日)

公益社団法人 日本薬学会

I はじめに

日本薬学会は、医薬品を中心とした領域の研究者や技術者が、学術上の情報交換を行い、学術文化の発展を目的とする学術団体です。1880 年に創設された日本で最も歴史ある学会であり、今後も薬学領域における中核的学術団体として発展していくことが本学会の使命であります。新しい医薬品の開発・製造、安全性の確認、臨床への供給など薬を使ってさまざまな病気を克服するという目的のため、英知を結集し発展する学術団体として機能しなくてはなりません。

この目標に向け、平成 28 年度は以下の課題に取り組みました。

- ① 136 年会の開催：日本薬学会の最大の学術活動となる 136 年会が、北里大学の伊藤智夫組織委員長の下、横浜市で開催され、活発な発表と討論が行われました。特に大村智先生によるノーベル賞受賞記念の特別講演は多くの会員の刺激となりました。また東日本大震災で被災された大学関係者を支援するため、本年会で発表を行う被災大学院生・学部学生に経費を支援しました。
- ② 支部活動・部会活動：8 つの支部は各地域における薬学活動の活性化に向けて、また 10 の部会は広範な学術分野をカバーする薬学研究の各分野の高度化達成に向けて、それぞれ予定通りに活動しました。6 年制薬学教育における研究活動の低下が懸念される中、昨年度に引き続き、支部や部会の年会・シンポジウム等において学部学生に積極的に研究発表させる等の努力がなされました。医薬化学部会は、24 年度に開始した創薬人育成事業を継続し、全国 8 地域の学生を対象に創薬に関するセミナーを行い、好評を得ています。
- ③ 薬学教育の改善：文部科学省の委託を受け、「薬学教育の改善・充実に関する調査研究」をスタート致しました。改訂モデル・コアカリキュラムの英訳や 4 年制博士課程の現状分析を行っています。
第 2 回若手教育者のためのアドバンスワークショップ、第 4 回医療人養成としての薬学教育に関するワークショップと第 6 回全国学生ワークショップを開催致し、それぞれ活発な議論が行われました。
- ④ 他学協会との連携：日本学術会議と、両者が主催となるシンポジウムを数回開催しました。また、日本学術会議会員および連携会員の候補者に関する情報提供を行いました。
- ⑤ グローバル化への対応：広く社会全般でグローバル化が進む中、薬学の教育と研究もグローバル化の推進が求められています。ブエノスアイレスの FIP（国際薬学連合）第 76 年会への協力と支援を行いました。アメリカ薬学会、ドイツ薬学会、韓国薬学会へ講師を派遣するなどしました。
- ⑥ 研究支援事業：大学院博士課程院生への長井記念薬学研究奨励支援事業を平成 29 年 4 月から実施するために、採用者を選考いたしました。

日本薬学会は、本年度も会員各位のご協力により、我が国の生命科学と医療を支えるための薬学研究および薬学教育を発展させるという使命に向けた任務を果たすことができました。会員各位のご協力に心よりお礼申し上げます。

II 事業実施状況

1 代議員総会の開催

日 時：平成 28 年 3 月 26 日（土）

場 所：パシフィコ横浜

2 学術研究・教育活動の推進

1) 学術誌の発行

日本薬学会発行の学術誌 3 誌の特性を最大限に活かした原著論文・総説の掲載により、薬学ならびに関連分野における科学の発展に寄与してまいりました。また、国際的高度情報化社会の趨勢と、本学会の公益性を視野に、J-STAGE（科学技術振興機構）を利用したオープンアクセスによる情報発信をはじめ、昨年度に引き続き、画面インタフェース開発への協力を行いました。

本学会の学術誌への投稿意欲を高めるために、査読期間の短縮、出版までの作業の効率化を継続的に推進してまいりました。

YAKUGAKU ZASSHI では臨床薬学領域研究の多様化に対応するため、ケースレポートの論文投稿および臨床薬学領域の英文投稿を受け付けました。

Chemical and Pharmaceutical Bulletin ではテーマを絞った、興味深い内容のカレントトピックスの掲載を開始しました。大村智博士のノーベル生理学・医学賞受賞を記念し、Special Section 掲載号(Vol. 64 No. 7) を発行しました。

Biological and Pharmaceutical Bulletin では誌面の充実を目的とし、国内の著名な研究者に総説の執筆を依頼いたしました。

平成 28 年度の学術誌の刊行は、以下のとおりです。

① YAKUGAKU ZASSHI 第 136 巻

掲載論文数：201 編／昨年比 31 編増(早期公開 7 編／昨年比 2 編増)

発行部数：750 部（月刊）

② Chemical and Pharmaceutical Bulletin 第 64 巻

掲載論文数：249 編／昨年比 98 編増 *Special Section の 50 編含む

(早期公開 52 編／昨年比 27 編増 *Special Section の 9 編含む)

発行部数：800 部（月刊）*Vol. 64 No. 7 の発行部数：1,300 部

③ Biological and Pharmaceutical Bulletin 第 39 巻

掲載論文数：287 編／昨年比 9 編増(早期公開 73 編／昨年比 14 編増)

発行部数：800 部（月刊）

2) 学術研究集会の開催および部会・支部活動の支援

(1) 年会の開催

年会は、領域の異なる研究者が一堂に会して、薬学の進歩を横断的に知ることのできる全国規模の大会です。特にシンポジウムの企画・募集にあたっては、多様な領域を包含できるものとなるよう留意してまいりました。第 136 年会および第 137 年会について、組織委員会を中心に次のとおり開催ならびに企画しました。

①第 136 年会（横浜）

日 時：平成 28 年 3 月 26 日（土）～29 日（火）

場 所：パシフィコ横浜

テーマ：「次世代の薬学への羅針盤～新しい薬学への出帆～」

組織委員長：伊藤 智夫（北里大学薬学部）

②第 137 年会（仙台）

日 時：平成 29 年 3 月 24 日（金）～27 日（月）

場 所：仙台国際センター他

テーマ：「復興と発展、薬学の未来へ」

組織委員長：遠藤 泰之（東北医科薬科大学薬学部）

（2）部会の活動

部会は、薬学研究の高度化と若手研究者や薬学生の育成を共通の主要課題とし、シンポジウム、フォーラム、研究会等を開催するとともに、創薬研究者の育成等、各部会の環境、状況にあわせて特色ある活動を進めてまいりました。また、部会間で協力し、他機関との連携を図りました。

本年度の部会活動の詳細は（別紙 1）のとおりです。

（3）支部の活動

支部は、会員が日本薬学会を身近な存在として活用できる場です。学生会員の積極的な参加を促す学術集会、地域薬剤師会との交流、薬学講習会での最新情報の入手、支部表彰事業ならびに高校生への薬学ガイダンス等地域の特性を生かした事業展開を行うよう努力してまいりました。一般社会へ薬学の正しい理解を広げるとともに、若い世代へ積極的に働きかけを行い、会員増強運動を進めました。

本年度の支部活動の詳細は（別紙 2）のとおりです。

（4）創薬セミナーの開催

本セミナーは、創薬に係わる最先端の話題と情報を提供し、今後の創薬に関して有益な議論をする場として毎年開催しております。第 32 回は、例年の社長講演、招待講演や自由討論会を実施しました。若手創薬研究者が、グローバルな視野で最先端創薬を考える場を提供しました。

・第 32 回創薬セミナー

日 時：平成 28 年 7 月 13 日（水）～15 日（金）

場 所：八ヶ岳ロイヤルホテル

3) 学術研究・教育活動の奨励・表彰

（1）研究奨励

日本薬学会では、博士の学位を有する多様な薬剤師あるいは薬学研究者を輩出することを使命として、学位を取得するための研究奨励支援を行うべく、平成 27 年度より採用者へ奨励金の貸与を開始しました。平成 28 年度は長井記念薬学研究奨励特別委員会を設置し、運用手続きの整備を行いました。当年度採用者を加え、貸与を継続し、また、選考委員会による選考結果を受け、平成 29 年度採用内定者を決定しました。

また、東日本大震災で被災した学生会員の年会一般学術発表者ならびにシンポジストに対しては、第 132 年会（札幌）より継続して学術的活動経費の支援を行ってまいりました。

（2）授賞

薬学研究の奨励・表彰は、日本薬学会の目的である薬学の進歩・普及にとって重要な事業です。授賞規定に基づいて選考された公正な選考結果を受け、平成 29

年度学会賞受賞者を決定しました。

- ① 薬学会賞 4件
- ② 学術貢献賞 3件
- ③ 学術振興賞 2件
- ④ 奨励賞 8件
- ⑤ 創薬科学賞 2件
- ⑥ 功労賞 1件
- ⑦ 佐藤記念国内賞 1件

(3) 他機関関係賞等への推薦

各財団・機関から本学会への関係賞等の推薦依頼に対し、会員から候補者を選考し、推薦しました。さらに、国（省庁）による表彰について会員から候補者を推薦しました。

4) 薬学教育基盤の整備

薬学教育に関する諸課題について、日本薬剤師会、日本病院薬剤師会、日本医療薬学会、薬学教育協議会、全国薬科大学長・薬学部長会議ならびに日本学術会議薬学教育分科会等と連携し、取り組みを推進してまいりました。また、日本医学教育学会や日本保健医療福祉連携教育学会、日本薬剤師研修センター等の論議の場に参画し、協働して検討を進め、コンセンサスを踏むよう努めてまいりました。

(1) ワークショップの開催

本年度は次のとおりワークショップを開催しました。

- ・第6回全国学生ワークショップ
日 時：平成28年8月6日（土）～7日（日）
場 所：クロス・ウェーブ梅田
テーマ：「社会が私たちに求めているものは何か？
～未来を支える薬剤師としてのプロフェッショナルリズムを考える～」
実行委員長：塩田 澄子（就実大学薬学部）
- ・第2回若手教育者のためのアドバンストワークショップ
日 時：平成28年12月25日（日）～27日（火）
場 所：クロス・ウェーブ府中
テーマ：「卒業の時に求められる資質・能力とその評価を考える」
実行委員長：川崎 郁勇（武庫川女子大学薬学部）
- ・第4回医療人養成としての薬学教育に関するワークショップ
日 時：平成29年1月20日（金）
場 所：慶應義塾大学薬学部芝共立キャンパス
テーマ：「事例で学ぶ臨床研究論理」
実行委員長：石川 さと子（慶應義塾大学薬学部）

(2) 文部科学省委託事業の実施

平成28年度大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業の「薬学教育の改善・充実に係る調査研究」を受託し、大学院4年制博士課程の現状把握および分析委員会では昨年へ続き、アンケート調査を実施しました。海外の薬学教育との比較調査委員会では改訂モデル・コアカリキュラムの英訳を進めるとともに、海外調査に赴き、英訳したモデル・コアカリキュラムへの意見を聴取し、併せて日本の学士教育および大学院教育のアンケート結果との比較調査を行いました。

(3) 第三者確認作業の開始

社会に資する生涯研鑽支援活動の一環として、健康サポート薬局に係る研修プログラムを確認するための第三者機関として、厚生労働省から指名を受け、確認作業を行いました。本年度は、6機関に適合通知を発出しました。

3 学会情報の配信

日本薬学会の大きな役割の一つに信頼できる科学情報を発信していくことが挙げられます。

薬学の学術教育研究、医療における薬学の貢献、さらには薬学分野の行政・産業等の最新の動向を、会員間のみならず広く社会と共有し、医療健康福祉社会の発展に寄与するために、最適な手段と場、媒体を準備・提供し、会員間の情報交換および会員と非会員・社会一般との接点を拡大し、情報の交流を促進しました。

(1) 社会への発信

「男女共同参画社会づくり宣言」を宣しました。

私たちは、新しい未来を創造しながら、生命現象の解明と創薬および医薬品の適正使用をめざし、人類の健康と福祉のために着実な発展を続けます。そのために、性別年齢を問わず、すべての人が対等な立場で個性と能力を十分に発揮し、自ら希望に沿った形で活躍できる男女共同参画社会を実現します。

(2) 会誌の発行

会誌「ファルマシア」は、会員の広報誌として内外の情報を分かり易く提供し、また会員相互のコミュニケーションの円滑化をはかることを基本として編集しております。学会広報および情報誌として一層の充実をはかるべく、特集号（6回）とミニ特集号（4回）の企画を含め、年間12号の発行を実施しました。なお、本学会会員には、購読者番号とパスワードの入力により、本誌発行日にJ-stage 登載のWEB版を閲覧可能としました。また、J-stage 登載の周知や過去掲載分をコラムごとに取り纏めるなどHPをリニューアルしました。

第52巻 発行部数 約17,600部（月刊）

(3) ホームページの更新

学会の最新情報の掲載ならびに会員へ向けての情報公開に日々努めました。対外的な情報発信を強く意識し、若い世代へエールを送り、薬に関心を持っていただけるようページを更新しました。

また、薬学会紹介リーフレットを改訂し、非会員へ向けて積極的にアピールしました。

(4) メールマガジンの配信

メールマガジン「ファームナビ」は、配信を希望する Pharm パスポート登録者に「日本薬学会理事会だより」として日本薬学会の動向やメッセージを速やかに配信し、学会情報の共有化をはかりました。また、外部からの要請に応え、会員への一斉送信用のツールとしても活用しました。

配信6回 配信数 18,833名（平均）

(5) 刊行

薬学普及啓発誌の「高校生のための薬学への招待」と「これから薬学をはじめるあなたに」は、年間の利用は30,000部に達しています。高校生の進路指導資料として、また大学1年生のガイダンス資料として、薬学ならびに薬学部への正しい理解と知識を深めることに寄与しています。

また、中高生へ向けて薬学の魅力を伝える薬学紹介DVD「ナガイ博士の薬学への招待」を完成し、マスコットキャラクター（ナガイ博士とドリン君）のさらなる展開を計りました。

4 他機関との交流協力とグローバル化の推進

1) 他機関との交流協力

他機関との交流と協力をはかり、広く社会に貢献するよう努めました。

① 日本学術会議との連携

薬学の存在感を高めながら、我が国の科学技術の推進に寄与するため、科学者コミュニティを代表する機関である日本学術会議薬学委員会との連繋・協力を保ち、共同主催にて以下のシンポジウムを開催しました。

- ・「新しい展開を目指す化学・物理系薬学領域の研究」

日 時：平成28年5月20日（金）

場 所：日本学術会議講堂

共同主催：日本学術会議薬学委員会化学・物理系薬学分科会、生物系薬学分科会

- ・「薬学分野の参照基準と4年制薬学教育に求められる人材育成」

日 時：平成28年9月28日（水）

場 所：日本学術会議講堂

共同主催：日本学術会議薬学委員会薬学教育分科会

- ・「専門・認定薬剤師制度の現状と課題 シンポジウム」

日 時：平成28年10月26日（水）

場 所：日本学術会議講堂

共同主催：日本学術会議薬学委員会チーム医療における薬剤師の職能とキャリアパス分科会

- ・「ITと創薬の融合～ビッグデータとスーパーコンピューティングで生命現象を解く～」

日 時：平成29年1月13日（金）

場 所：日本学術会議講堂

共同主催：日本学術会議薬学委員会生物系薬学分科会

② 共催・協賛・講演

本学会と密接な関連をもつ団体の講演会、学術集会を共催、協賛あるいは後援（別紙3）（開催：国内139件、国際17件）し、積極的に支援してまいりました。

③ 日本化学連合への参画

④ 日本学術振興会への参画

卓越研究成果公開事業におけるデータベース改修ならびにデータ掲載に向け協働しました。

2) グローバル化の推進

国際機関との交流をはかり、世界の学術振興に寄与しました。

① FIP への対応

- ・国際薬学連合 (FIP) 第 76 回年会 (8 月 28 日～9 月 1 日、ブエノスアイレス) をはじめとする FIP 事業への支援を行い、代表者 7 名を派遣。また、第 136 年会にて FIP フォーラムを開催。

② 代表者および講師の派遣・招聘

- ・ドイツ薬学会
第 136 年会に講師 2 名を招聘
- ・アメリカ薬学会
アメリカ薬学会年会 (11 月、デンバー) に講師 1 名を派遣
- ・韓国薬学会
韓国薬学会年会 (10 月、ソウル) に代表者 (会頭) および講師 3 名を派遣

5 学会基盤の整備・確立

1) 会員関連

(1) 会員増強への取り組み

次世代へ向けて、より一層の発展を目指すためにも、会員は、学会の基盤であり財産です。多岐に亘る薬学の学術の魅力の向上を計り、もって会員増強へ繋げてまいりました。

(2) 会員登録状況

会員数 (平成 29 年 1 月 31 日現在)	17,895 名
正会員	17,625 名
(一般会員)	14,777 名)
(学生会員)	2,848 名)
永年会員	188 名
有功会員 (第二項)	41 名
名誉会員	41 名
賛助会員	213 機関

平成 28 年度末 (平成 29 年 1 月 31 日) 現在、正会員のうち 1,010 名が平成 28 年度会費未納者でした。

(3) 名誉会員の推薦

定款第 5 条に基づき、理事会において名誉会員候補者 5 名の推薦を決定しました (別紙 4)。

(4) 有功会員および永年会員の決定

定款第 5 条に基づき、理事会において有功会員 1 名と永年会員 16 名を決定しました (別紙 4)。永年会員には、記念品を贈呈いたしました。

2) 財政基盤の確立

(1) 賃貸収入と会館の運営

学会運営は、会費と学術事業収入等の経常収入によって賄われるべきものではありますが、本会では会館の賃貸収入をもって学会運営の財務基盤を補完しております。賃貸事業は社会情勢の影響を多分に受けることから、常に状況把握を行い、

管理代理者である三菱 UFJ 信託銀行と連繋を密にし、運営基盤の安定化に資するよう努力してまいりました。

学会が管理する会館施設の運営は、会員の利用施設としての有効活用と、一般社会への開かれた学会としてのイメージアップのため、委託先のビル管理会社と協力して利用者の便に供するよう努めました。

(2) 長井記念館の維持管理

当館の経年劣化に伴う修繕計画について、三菱 UFJ 信託銀行を始めとする関係各社からの情報を基に、主体的に把握するよう努めてまいりました。

(3) 公益法人としての取り組み

公益事業を主たる目的として、公益性を重視した事業の実施ならびに公明な会計を行うことを周知徹底いたしました。

また、公益法人として篤志を受けた寄附者のお名前をHPに掲載しました。

平成 28 年度役員一覧

会 頭	太田 茂 (広島大院医歯薬保)	
次期会頭	奥 直人 (静岡県大薬)	
副 会 頭	大高 章 (徳島大院医歯薬)	遠藤 泰之 (東北医薬大薬)
総務担当理事	嶋田 一夫 (東大院薬)	出屋敷喜宏 (鈴鹿医療大薬)
	野中 孝昌 (岩手医大薬)	奥田 晴宏 (国立衛研)
財務担当理事	八木 清仁 (阪大院薬)	石井伊都子 (千葉大病院薬)
広報担当理事	平井みどり (神戸大病院薬)	菊池 寛 (エーザイ)
国際交流担当理事	内川 治 (武田薬品工業)	周東 智 (北大院薬)
編集担当理事	中山 和久 (京大院薬)	佐々木茂貴 (九大院薬)
学術事業担当理事	向 智里 (金沢大)	望月 眞弓 (慶應大薬)
	春田 純一 (阪大院薬)	宮澤 宏 (徳島文理大香川薬)
	山崎 裕康 (神戸学院大薬)	
常任理事	横山 祐作 (日本薬学会)	
監 事	大島 吉輝 (東北大院薬)	近藤 裕郷 (医薬基盤研)
	高柳 輝夫 (ヒューマンサイエンス財団)	

常置委員会

役員候補者選考委員会	野中 孝昌 (岩手医大薬)
代議員選挙管理委員会	野中 孝昌 (岩手医大薬)
学会賞選考委員会	大森 栄 (信州大薬病院)
創薬科学賞選考委員会	春田 純一 (阪大院薬)
佐藤記念国内賞選考委員会	平井みどり (神戸大病院薬)
創薬セミナー委員会	大島 吉輝 (東北大院薬)
広報委員会	米持 悦生 (星薬大)
ファルマシア委員会	松木 則夫 (東大名誉)
学術誌編集委員会	奥 直人 (静岡県大薬)
薬学雑誌	鈴木 匡 (名市大院薬)
CPB	竹本 佳司 (京大院薬)
BPB	細谷 健一 (富山大院薬)
総務委員会	奥 直人 (静岡県大薬)
財務委員会	奥 直人 (静岡県大薬)
国際交流委員会	大高 章 (徳島大院医歯薬)
年会問題検討委員会	奥 直人 (静岡県大薬)
薬学教育委員会	赤池 昭紀 (名大院創薬)

特別委員会

長井記念薬学研究奨励特別委員会	佐々木茂貴 (九大院薬)
男女共同参画委員会	奥 直人 (静岡県大薬)

支部

北海道支部	武田 宏司 (北大院薬)
東北支部	上田 條二 (青森大薬)
関東支部	新井 洋由 (東大院薬)
東海支部	井上 誠 (愛知学院大薬)
北陸支部	今中 常雄 (富山大院薬)
近畿支部	金子 周司 (京大院薬)
中国四国支部	黒崎 勇二 (岡山大薬)
九州支部	武田 泰生 (鹿児島大病院薬)

部会

化学系薬学部会	向 智里 (金沢大)
医薬化学部会	上野 裕明 (田辺三菱製薬)
生薬天然物部会	阿部 郁朗 (東大院薬)
物理系薬学部会	萩中 淳 (武庫川女大薬)
構造活性相関部会	高木 達也 (阪大院薬)
生物系薬学部会	青木 淳賢 (東北大院薬)
薬理系薬学部会	南 雅文 (北大院薬)
環境・衛生部会	永瀬 久光 (岐阜薬大)
医療薬科学部会	千堂 年昭 (岡山大病院薬)
レギュラトリーサイエンス部会	川西 徹 (国立衛研)